

EPの視点を取り入れた英語授業改善の試み

Improving Teaching Approaches in English Classes by Utilizing an EP Perspective

池田 真寸子

Masuko Ikeda

Regrettably, most students of my English classes seem to be lethargic. Since they are not English majors, it is understandable that they are not keen on learning the language. In order to figure out why their energy level is so low, I had the students write their ‘puzzles’ regarding their English learning in the past. By sharing and discussing their ‘puzzles’ with other students, they found out the reasons why they take such an unmotivated attitude in class. In this article how my way of teaching has been affected and changed by their puzzles is described.

Keywords: Exploratory Practice, puzzle, quality of classroom life, collegiality

1. はじめに

筆者の本務校では、授業改善アンケートが年に二回実施されている。学生から授業に関するアンケートをとることにより、教師が自身の授業改善をし、学生の不満や疑問を学期内に解消しようとするものである。教師によっては学期内に一度だけではなく、毎回の授業で感想を書かせている人もいであろう。このようなアンケートでは、一般的に学生が自分の学習状況や教師の指導法について感想を書くだけで、そのような結果に至らせる原因まで言及しないことが多い。本稿では、学習者が英語学習について日頃感じている問題点や疑問点を挙げ、なぜそのような問題を持つに至ったかという原因まで学習者に考えさせる、Exploratory Practiceを筆者が担当する学生に行い、それに基づいて行った授業改善について述べる。

2. Exploratory Practice

筆者はJACET授業学関西研究会の会員であるが、その研究会の輪読テキストのひとつとして Judith Hanks 著、*Exploratory Practice in Language Teaching* を読み、Exploratory Practice (以下EP) を知ることとなった。EPとは言語教育における研究と教育と学習を統合しようとするもので、1900年代の初めに考えられた (Allwright, 1993; Allwright & Bailey, 1991; Allwright & Lenzuen, 1997)。¹ EPはAction Research とよく似ているように見えるが、EPは教師のみならず、学習者も言語学習について考えることを奨励する。これをcollegialityと呼び、学習者も授業研究において教師の同僚であると考えられる。

Exploratory Practice is a form of practitioner research in which learners as well as teachers are encouraged to investigate their own learning /teaching practices, while concurrently practising the target language.²

1 Hanks, 2015, p.2

2 Hanks, 2017, p.2

また、Allwright が指摘するようにEPでは学習者と教師が共に教室で行われていることを理解することに重点を置き、問題の解決を求めるのではなく、問題を理解することを最優先とする。

Exploratory Practice [...] is a way of getting teaching and learning done so that the teachers and the learners simultaneously develop *their own understandings of what they are doing* as learners and teachers.³

EPのフレームワークは下記の7つの原則に基づいている。⁴

Principle 1: put 'quality of life' first

Principle 2: work primarily to understand language classroom life

Principle 3: involve everybody

Principle 4: work to bring people together

Principle 5: work also for mutual development

Principle 6: integrate the work for understanding into classroom practice

Principle 7: make the work a continuous enterprise

原則1、2は言語教室での生活の質を第一に考え、まずその生活を理解しようとする。原則3～5は、教師だけでなく、学習者も一緒に問題を探求し、共に成長していくということ。そして原則6、7は、問題を理解し、理解しようとしたことを教室での実践に統合し、継続していくということ。

EPは上記のように原則はあるが、これを実践するための具体的な手順はない。これは過去にEPの方法論をマニュアル化したために失敗した反省に基づくものであり、実践者が実践を深めるにつれ、特定の手法に縛られなくなるからである。⁵ Hanksの論文⁶にはEPを実践した複数の教師の体験談が掲載されている。それによると、ある教師のEPを実践する手順は、学習者が外国語学習における悩みや問題（これをEPではpuzzleと呼ぶ）を先ず個人で考えさせ、同様のpuzzleを持つ人とグループを作り、グループ内でそのpuzzleがなぜ起こったかについて考え、他のグループとも交流してpuzzleの原因について考えを深める。10週間ほどこの作業を続け、最後にポスターセッションを設けて発見したことを互いに発表しあう。同時に教師も自分が言語教育に関して持っているpuzzleについて考え、学習者と共にそのpuzzleについて議論するというものである。この10週間を費やしたという教師の例では、教師がEAP (English for Academic Purposes) のクラスで教えるのと同じテクニックを使ってEPを実践した。EAPでは環境問題のような、あるテーマについて学習するが、そのテーマをEPでは外国語学習におけるpuzzleというテーマに置き変えたのである。

学習者は個々に学習上の悩みを持っているが、グループで悩みについて議論をすると、同じ悩みを持つ人に出会い、自分一人だけが困っているのではないことを知って勇気づけられる場合が多い。例えば前述の教師の例では、複数のグループが結局同じpuzzleである、Why do we struggle to use new vocabulary, even when we know the words? について考えることになったという。また他の教師の例では、二人の学生が“Why can't I speak English, even after many years of study?” という共通のpuzzleを持っていることが分かり、他の学生や教師に意見を聞く等して原因を考えたところ、一人は自分の引っ込み思案な性格に起因すると結論し、もう一人は英語を話すときに文法を考えないで話すからだ、と分かった。原因が分かったからといって直ちに問題が解決するわけではないが、少なくともこの二人は自己の学習に責任を持った学習者になるための洞察力が得られたといえる。⁷

3 Hanks, 2017, p.3

4 Hanks, 2017, p.97

5 柳瀬, p.74

6 Hanks, 2017, p.170

7 Hanks, 2017, pp. 172-173

3. 学生のpuzzles

筆者のクラスではEP実践のためだけに前述の例のように10週間を費やすことはできないので、新学期初回の授業時間を使って、学生各自に英語学習について持っている悩みや苦手なことについて紙に書かせた。また、なぜそのような悩みや苦手意識を持つようになったかについても併せて書かせた。その際、自分に原因があるのか、他者（教師や周囲の人等）に原因があるのかについても考えさせた。個人で考えたあとは、クラスメイトで自分と同じような悩みを持っている人がいないか探させ、その原因となるものは自分と同じか、異なるか、異なる場合はなぜそうなるのか、について議論をするように指示した。学生がpuzzleについて考える前に先に教師からpuzzleの例を出すと、学生はその例に引っ張られて同じようなことを書く恐れがあったので、例も選択肢も示さず、思いのままに書いてもらった。

このようにして2019年度後期、筆者が担当する一般教養英語科目7クラスの初回授業に出席した非英語専攻の学生147名全員にpuzzleについて考え、紙に書いてもらった。これは後期の初日、つまり新しい授業が始まる前に書かせたので、筆者の指導法を批評する意見は書かれない。このことは筆者を心理的に楽にし、学生のpuzzleについて調べることに前向きに取り組めた。

英語学習の悩みで苦手として書かれたものは次の通りである。

1. 単語 (23%)
2. 文法 (22%)
3. 全て (17%)
4. リスニング (16%)
5. 長文読解 (15%)
6. スピーキング (5%)
7. 発音 (2%)

一人の学生が複数の項目を苦手と答えた場合もカウントしている。順序が下位のスピーキングや発音、また、ここに挙がっていない項目は学生が得意ということではなく、単に苦手として第一に思いつかなかっただけだと思う。このような項目に苦手意識が生まれた理由をペアやグループで考えさせたところ、大多数の学生は中学校以降、覚えるべき単語の多さに学習意欲をそがれ、文法の複雑さについていけなくなった。従って単語と文法を基に解釈する英文読解は全く理解できなくなり、単語が分からないので、聞き取りもできないということであった。学習意欲がそがれた原因がどこに在ったのかという議論では、

- 自分自身：学習時間が不十分。努力不足。テストで良い点がとれなかった。
- 他の生徒：英語が苦手な自分に対し、心無い発言を繰り返した。
- 教師：英語が苦手な自分に対し、心無い発言を繰り返した。
- 指導法：復習に十分な時間をとらず、既に理解しているものとみなし、先へ先へと進んだ。
ひとりずつ指名し、皆に聞こえるような声での発言を求めた。
ペアやグループワークをさせ、教室内を歩き回るように指示した。
皆の前でスピーチや会話をさせた。

という結論になった。

4. 教師のpuzzles

学生のpuzzleの中に、教師が学生を一人ずつ指名し、大きな声で発言するように求められた、というものがあつたが、それに関連した筆者の教師としてのpuzzleは、指名した学生の声は、なぜそれほど小さく聞きづらいのか、である。特にマスクを着けたまま発言されると一層聞きづらく、発音指導

はほぼ不可能になる。そこでよく聞こえるように、これまでの授業ではハンドマイクを使って発言させていたのだが、学生のpuzzleによると、それこそが学習意欲を失くさせる行為であった。筆者は英語が苦手という学生の立場に立たず、学生は教師が発音指導をできるように大きな声で発声し、何が理解できないのかを教師に知らせるために、問題に答えるべきだと考えていた。学生の puzzleの中には、教師はなぜ自分で答えを言わずに学生に答えさせるのか、というものがあつた。学生は正解を知りたいだけで、他の学生が正解を知っているかどうかには興味がない。しかし、教師は学生に発言をさせて理解度を把握しないと授業を進めていけない。

学生の声聞き取りづらいのと同類のpuzzleは、教師の後についてクラス全員で発音する練習の際、学生の誰一人として声を出さないことである。また、会話練習で隣の人もしくは友人とロールプレイの練習をするように指示しても、学生が全く動かないことである。筆者はこのような学生は、学習意欲を持たず、非常に消極的な態度で授業に臨んでいるのだと考えていた。しかし学生のpuzzleによると、英語は全て苦手というほどに苦手意識を持っている学生にとっては、他の誰もが発音しないのに、自分だけが声を出して目立ち、それが正しい発音でない場合、自分が嘲笑の対象になりかねないと危惧するあまり発声できないのであつた。

5. 指導方法改善策

Puzzleとして書かれた、学生の指名されたくないという要望と、教師は学生の理解度を把握する必要があるということの折衷案として、筆者は指名した学生の近くに立ち、教師にだけ聞こえるような小さな声の発言でも良いとした。すると自信がなくても発言しようとする空気ができ、クラスの雰囲気はリラックスしたものになった。

また、学生が英語に苦手意識を持つようになった原因の一つに、英語の試験で良い点がとれなかった、というものがあつた。筆者は担当する全クラスで毎回短文や単語の小テストを行う。宿題としてMemrise (<https://www.memrise.com>) や Duolingo (<https://www.duolingo.com>) を課し、その宿題に含まれている短文や単語を抜粋して小テストの問題を作成する。これまでは、筆者がこの程度までは覚えて欲しいと思う英語表現や単語を出題し、小テスト結果が全体に芳しくなくても、少数の高得点獲得者のためにテストの難易度を下げなかった。このため、特に下位クラスの学生は、小テストのための勉強をする気力を失くしてしまった。そこで下位クラスには学生自身に覚えるべき短文や単語を抜粋させ、それを小テスト問題とした。つまり、最初から問題と答えが分かっているので、学生は全て暗記すれば良いだけである。それでも満点はとれないのであるが、何を覚えれば得点できるかが明確なため、学生はテスト準備をしようという前向きな気持ちになり、ほぼ6割以上の正解率が得られるようになって学習意欲が高められた。

ロールプレイの練習で、学生は全く動かないと前述したが、ペアやグループワークをさせられるから英語が苦手になったという学生がいる以上、無理強いせず、会話表現を一人で発音練習することも許容するようになった。また、クラス全体でテープの後について発音する練習については、クラス全体では沈黙してしまうので、学生個々で発音練習をさせ、教師はその間、机間巡視をし、個別に発音指導をするようにした。その際、周囲の人に自分の発音が聞かれて恥ずかしい思いをしないよう、教室全体にBGMを流した。

教師が復習に時間を割いてくれない、という不満については、前回の授業内容だけでなく、初回の授業からの重要項目を復習するようになった。回が進むにつれて、復習する量も増えるので復習に費やす時間は長くなるが、我慢強く繰り返すことによって学生は暗記し、既に数回復習した項目は短時間で復習できるようになる。

6. おわりに

筆者はこれまで学習者の興味をひく、英語の効果的な教授法とは何かという方法論に関心が向き、授業が行われているclassroom lifeについては考えが及ばなかった。一見無気力に見える学生については、英語に興味がなく、学習活動そのものが嫌いなのだろうと推測していた。しかし今回英語学習の悩みについて議論をさせると、英語嫌いになった過程が分かり、授業中に感じる困惑についても理解ができた。英語が苦手な学生は、教師の質問に対する自分の答えが正しいかどうか自信がなく、英語の発音にも自信がないのに、大きな声で答えるように指示され、間違えると教師や他の生徒から心無い言葉がかけられる。他人とコミュニケーションをとるのが苦手な学生にとってはペアやグループでの学習は苦痛で、自主的に相手を探すため教室内を歩き回るように指示されるのは更に心理的な負担となる。このような状況では、Principle 1 の、'language classroom life' における 'quality of life' は学生にとって質がよいとは言えない。例えば英語修得に効果があるとされる教授法で、グループワークを推奨されていても、自分が担当している学生にはこの教授法をそのまま応用できるのかという点を、学生の気持ちに寄り添って判断する必要がある。

教師が学生に期待することに関して、HanksはEPを経験したBellaという教師にインタビューをし、それについて述べている。⁸

Bella postulated that teacher expectations are often based on a lack of understanding of the difficulties their learners have to face. She explained that her EP work in exploring possible reasons why (principle 2) certain learners had difficulties with spelling had given her a greater understanding of the complexities of the task:

Bella: it makes you realize that actually it isn't as easy as you think it is.

Bellaは一部の生徒がなぜ綴りに困難を感じるのか理解できないでいたが、Principles 3, 4 に従って、生徒自身にこの問題について意見を聞き、複数の同僚に相談したり、綴りを教えるための教材を作成したりする過程で、何が難しいのかを徐々に理解することができるようになった。BellaがEPを経験していくにつれて変化した心の動きをHanksは次のように述べている。⁹

As she continued, the moments of transition from irritation to puzzled curiosity and beyond can be traced.

Bellaは最初、なぜ生徒は正しく綴れないのかと苛立っていたが、困難さを理解するにつれ正しく綴るということは自分が思っているほど簡単ではないことに気付いた。

教師は、学生はなぜこんな簡単なことができないのだろうと思いがちであるが、それを学生の努力不足や勉強不足と片付けず、Bellaのようにpuzzled curiosityをもって何が原因なのかを探求し、教師の方から学生に寄り添うことがEPにおいて重要である。

本稿の冒頭で言及した授業改善アンケートは、このEPを実施した2019年度後期にも第6回目の授業で実施された。そのアンケートの中に自由記述欄があり、私の授業は『学生に寄り添っている』という意見が見られた。教師が学生に寄り添うことは重要だと前述したが、たとえ一人の学生でも私の授業が学生に寄り添うものだと感じてもらえたのであれば、EPを実施し自分の授業を顧みた意義はあったと思う。Principle 7: make the work a continuous enterpriseという原則に従って、これからも学生のpuzzleを知り、教師のpuzzleも学生に知ってもらい、学生と共に英語教室での学びをより良質のものにしていきたい。

8 Hanks, 2015, p.22

9 Hanks, 2015, p.23

参考文献

- Allwright, D., & Bailey, K. (1991). *Focus on the Language Classroom: An introduction to classroom research for language teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Allwright, D. (1993). Integrating 'research' and 'pedagogy': Appropriate criteria and practical possibilities. In J. Edge & K. Richards (Eds.), *Teachers Develop Teachers Research* (pp. 125-135). Oxford: Heinemann.
- Allwright, D., & Lenzuen, R. (1997). Exploratory Practice: Work at the Cultura Inglesa, Rio de Janeiro, Brazil. *Language Teaching Research*, 1(1), 73-79.
- Hanks, J (2015) Language teachers making sense of Exploratory Practice. *Language Teaching Research*, 19 (5). pp. 612-633.
- Hanks, J (2017) *Exploratory Practice in Language Teaching: Puzzling About Principles and Practices (Research and Practice in Applied Linguistics)*. London: Macmillan.
- 柳瀬陽介 (2008) 「Exploratory Practiceの特質と「理解」概念に関する理論的考察—アクション・リサーチを超えて—」, 『中部地区英語教育学会研究会紀要』 38, pp. 71-80, 中部地区英語教育学会.